

Visuddhimagga 源泉資料年代論

森 祖 道

目 次

1. 問題の所在
2. 年代の判明せる人物
3. 年代不明の人物
4. 結 論

1. 問題の所在

Buddhaghosa (A. D. 5C. 前半) の主著と言われる *Visuddhimagga* (*Vsm*) について、筆者はかつて「*Visuddhimagga* 著述事情考」という一論を発表した¹⁾。そこでは主として彼 Buddhaghosa の本書執筆の動機や経過、あるいはその教団的背景等の問題に関して検討し、同時にスリランカの首都 Anurādhapura の Mahāvihāra に当時、伝持されていたとされる古代シンハラ語等のいわゆる「古註釈書類」の内の如何なる文献を参照して、Buddhaghosa は本書を制作したかという点についても詳しく論究した。即ち本書に引用されている源泉資料 (source) としての古註釈書類は、*Vinayaṭṭhakathā*, *Suttaṭṭhakathā*, *Majjhimaṭṭhakathā*, *Samyuttaṭṭhakathā*, *Anguttaraṭṭhakathā*, *Abhidhammaṭṭhakathā*, *Aṭṭhakathā* (単数形), *Aṭṭhakathā* (複数形), *Aṭṭhakathācāriyā*, *Ācariyā*, *Ācariyamata*, *Porāṇā* (*Pubbācariyā*), *Porāṇakattherā*, *Bhāṇakā* (*Dīgha*, *Majjhima*, *Samyutta*, *Anguttara* の各 *Bhāṇaka*) 等である²⁾。そしてこれらは、今日 *Vsm* を含めたいわゆるパーリ・アッタカター (三蔵の直接の註釈書に限る) の中に引用されている凡ての古資料——これらが当時 Mahāvihāra に保持されていた古註釈書そのものであったと考えられる——の主要なるもの殆ど全部であることが判明した。彼はこれらの古資料によって Mahāvihāra 派の教理思想を確認しつつ、一方では当時対立関係にあった同じアヌラダプラの Abhayagirivihāra の教理集成書 *Vimuttimagma* (漢訳『解脱道論』) を底本的に使用しながら Mahāvihāra 派の正統説を *Visuddhimagga* において主張力説したことは周知の通りである。

ところで又、筆者は最近「*Sumaṅgalavilāsini* の源泉資料とその年代」という一論を発表した³⁾。ここでは同じく Buddhaghosa の著作の一つとされる *Dīghanikāya Aṭṭhakathā* (*DA*) たる

Sumaṅgalavilāsint の源泉古資料について検討し、同時にそれらの古資料が成立した年代——それはとりもなおさず現在の *DA* の「内容的な成立年代」を意味するものである——に関しても詳論した。それは本書中に現れるスリランカの人名を検討することによって可能であった。即ち、一般に生存・活躍年代の不明確な古代インド人の場合とは相違して、古代スリランカの人物の場合には、在位年代が確定されている国王を始め、どの王の時代に活躍したかが直接間接に立証出来るような人物が比較的多数存在する。そこで本書中よりこのようなスリランカの人物をピックアップし、彼等を年代順に配列検討することによって、*DA* の源泉資料の成立年代、つまりは *DA* 自身の「内容的な成立年代」(特にその下限年代)を一応は明確になしえたのである。

そこで *Vsm* の場合も同様の方法によって、前述の如き源泉古資料、その成立年代、即ち現在の *Vsm* 自身の「内容的年代」を明確にする必要がある。このような観点より以下において、国王を始めとして *Vsm* 中のスリランカの人物の活躍年代を吟味する。但し彼等の中には、当然のことながら、年代不明の人物も多数存するので、先ず年代の確定出来る人物と、不明なる者とに分けて検討し、最後に結論について論ずることとする。

2. 年代の判明せる人物

Vsm 中に現れた古代スリランカ人、乃至はこの国と関係の深かった人物には、具体的な説話が記述されている者とそうでない者とが見られるが、彼等凡てを含めると総数 40 人に上る。その中で種々なる論拠によって活躍年代が推定可能の者は次の 18 人である。先ずパーリ語のアルファベット順に彼等一人一人を吟味して、個々にその年代を確定してゆく。

No. 1. Godattatthera (*Vsm* I—138)

彼は *Ābhidhammika Godattatthera* と呼ばれ、著名なアビダンマ論師であって、その所説は *Samantapāsādikā (Smp)* にも数回引用されている⁴⁾。その中で *Smp* II—307 には興味深い挿話が見られる。即ち、ある時教団内で椰子の実の殻で作った水の容器を盗んだ比丘が波羅夷罪 (*pārājika*) に問われようとした。その時彼はこのような些細な物品の窃盗の場合に波羅夷罪を適用するのは重刑に過ぎると主張し、彼のこの主張は時の国王 *Bhātiya* によっても支持されたという話がそれである。このことから彼 *Godattatthera* は *Bhātiya* 王 (*Bhātika Abhaya*, B. C. 19—A. D. 9)⁵⁾の時代、即ち西暦紀元元年前後に活躍した人物であることが判明するのである。

No. 2. Cūḷa-Abhayatthera (*Vsm* I—69, 96; II—394)

彼は *Tipiṭaka Cūḷa-Abhaya* と呼ばれた著名な註釈家であって、その名前や主張はアッタカター中に多く見出される⁶⁾。その中で *Dhammasaṅgani-Atṭhakathā (DhsA)* や *Samyutta-Atṭhakathā (SA)* 等には、彼と *Tipiṭaka Cūḷa-Nāgatthera* (次項) とが見解を異にし論争をしている記述が

見られるので、彼は Cūḷa-Nāga と同時代人と見做される。しかるに後者は次に論述する如く、B. C. 1 C の後半に活躍した人と考えられるので、彼もその時代の人と確定されるのである。

No. 3. Cūḷa-Nāgatthera (Vsm II—398)

彼も Tipiṭaka Cūḷa-Nāgatthera と呼ばれた著名な註釈家であり、アッタカターの各所にその名前や所説が見受けられる。その中で *VibhA* (p. 452) には、彼と Kūṭakaṇṇa(tissa) 王 (B. C. 41—19) との間の挿話が記されているので、彼は B. C. 1 C. の後半に活躍した人と知られる。

No. 4. Cūḷa-Samuddatthera (Vsm II—403)

この長老が遠くのものに近くなしうる神通 (iddhi) を具えていた例証として、飢饉 (dubbhikkha) の時に、彼は 700 人の比丘を伴ってすでに行乞すべき所がなくなった Tambapaṇṇi 島 (スリランカ) を去り、一足飛びに対岸 (インド) の Pāṭaliputta に行乞に行ったという挿話がここに出ている。ところで古代スリランカには、Ellawala によれば、次の四回の飢饉があった⁷⁾。

1. Duṭṭhagāmaṇī 王の時代 (B. C. 161—137)

Akkhakkhāyika 飢饉⁸⁾、あるいは Pāsaṇachātaka 飢饉⁹⁾と言われた。しかしこの時は全島的な飢饉ではなく、Malaya 地方の Koṭṭe を中心とするものであった。勿論それでも全島的な影響はあったであろうが、*Mahāvamsa* (*Mhv*) によれば¹⁰⁾、時の国王は二箇の高価な耳環を使って五人の漏尽の大長老に美味しい稷の酢団子を施し、彼等五人はそれぞれの場所において多くの比丘にそれを分与したとされる。即ち

- 1) Malaya Mahā-Devattera が Sumanakūṭa-pabbata にて 2,900 人に、
- 2) Pathavīcālaka Dhammaguttattera が Kalyāṇika-vihāra において 500 人に、
- 3) Talaṅgavāsika Dhammadinnatthera が Piyaṅgu 島にて 12,000 人に、
- 4) Maṅganavāsika Khuddatissatthera が Kelāsa (精舎)¹¹⁾にて 6,000 人に、
- 5) Mahā-Vyagghatthera が Ukkanagara-vihāra にて 700 人に、それぞれ分与して自らも食した。又 *Mhv* はこの箇所の直後 (XXXII, v. 55) に、器に食物を受ける長老 (sarakabbhattagāhikatthera) も Piyaṅgu 島にて食物を 12,000 人に施し自らも食したと記述している。これらの記述より、この飢饉の時には Duṭṭhagāmaṇī 王は自己の財宝を処分して比丘たちに施食し全力を尽して救難に当たったことが知られる。

2. Vaṭṭagāmaṇī 王の時代 (B. C. 103—102 & 89—77)

Brāhmaṇa Tīya という者が反乱を起し略奪を重ね、ダミラ人の五王が在位した時期 (B. C. 102—89) に起きたので Brāhmaṇa Tīya 飢饉と言われる¹²⁾。この飢饉は古代スリランカ最大の飢饉と言われ、十二年間も続きその間降雨もなく、人々は人肉を食した程であったという。そしてこの時、多くの比丘が食糧を求めてインド本土へ逃れ去ったと言われている¹³⁾。

3. Kuñcanāga (Kuḍḍanāga) 王の時代 (A. D. 194—195)

Ekanālika 飢饉 (1 ナーリ量だけ食べられる飢饉) と言われる。しかしこの時もなおこの王は

Mahāpeḷa (Mahāpāli) に住していた 500 人の比丘を中断なく養ったと *Mhv* にあるから¹⁴⁾、多少の余裕もあり第一の場合と同様、特に比丘教団は保護されていたと考えられる。

4 Siri Saṅghabodhi 王の時代 (A. D. 251—253)

この時代にも確かに全島に凶作の難があったが、*Mhv* (XXXVI, vv. 73 ff.) には、彼が決死の雨乞いをしたら降雨があり凶作の難を免れたという記述が見られる。その上この国王の在位期間はわずかに足掛け 3 年であり、飢饉は彼の在位中に起っておさまったようであるので比較的短期的と考えられ、それほど深刻な大飢饉であったとは思われない。以上の四飢饉を比較してみると、通常は厚く外護されている比丘たちが国外に逃れたと言われる第二の場合がやはり最長最大の飢饉であったと考えられる。そこで本題に戻って、Cūḷa-Samuddatthera が施食を求めて 700 人の比丘と共にインドに難を逃れたという飢饉は、第二の場合のそれであったと推察されるのである。したがって彼は Vaṭṭagāmaṇi 王の時代、即ち B. C. 2 C. 末より 1 C. の初頭に活躍した人物と推断出来るのである。

No. 5. Cūḷa-Sīvatthera (*Vsm* I—170, 313)

Vsm には

- (1) Cūḷa-Sīvatthera (I—170)
- (2) Saṃyuttabhāṇaka Cūḷa-Sīvatthera (I—313)

という二人の同名人が現れる。同一書でこのように呼び分けているので、両者は別人と見てよいであろう。その内で (1) は年代不明の人物なので次節に譲ることとして (No. 20), (2) の Saṃyuttabhāṇaka であった同名人について検討すると、*VibhA* (p. 445—447) には、Brāhmaṇa Tissa (Tīya) による危難 (bhaya) の時期に、彼と Isidattatthera, Mahā-Soṇatthera の三人がそれぞれいろいろと困苦を経験した挿話が出ている。したがって彼はこの危難の時代、即ち Vaṭṭagāmaṇi 王の時代の人であったことが判明する。

No. 6, Tissa-amacca (*Vsm* I—63)

古代史上、Tissa という大臣 (amacca) は二人存する。一人は Duṭṭhagāmaṇi 王の大臣であり¹⁵⁾、一人は Vaṭṭagāmaṇi 王のそれである¹⁶⁾。ところで *Vsm* の本文だけではこの二人の Tissa のどちらであるのか判断がつかかねるのであるが、本文の挿話は糞掃衣の一種としての胞胎布 (sothhiya) の実例として挙げられているものであって、それによれば、この Tissa の母が百金に価する布を以って胞胎 (gabbhamala) を拭き取らしめて、「糞掃衣として取る者があるだろう」とて Tālaveḷimaggā に棄てさせたというのである。そしてこの Tālaveḷimaggā とは、*Vsm* の *Ṭikā* には¹⁷⁾

Tālaveḷimaggā nāma Mahāgāme ekā vīthi. Anurādhapure ti ca vadanti.

とあって、先ず第一に南部 Rohaṇa の首府 Mahāgāma の一街路と考えられ、異説としてアヌラ

ーダブラのそれであると言われているのである。そこで上記の二人の王の事蹟を調べてみると、*Vatṭagāmaṇi* 王は最初の在位期間も、後年復位した後も国王としては常にアヌラーダプラに在任して、ただ五人のダミラ王がアヌラーダプラを占拠していた期間だけ、そこからほど遠からぬ *Vessagiri-vana* に陰れていたのがあった¹⁸⁾。これに対して *Duṭṭhagāmaṇi* 王はマハーガーマに生まれそこで成人し、後年父王の死後、当時アヌラーダプラを占拠していたダミラ人の *Eḷāra* 王を打破って全島の首府アヌラーダプラに帰還したのであるから¹⁹⁾、彼の大臣 *Tissa* も当然この両都市に住んだことがあったと考えてよい。したがって彼 *Tissa* の母に関する話をめぐってマハーガーマとアヌラーダプラの両都の名が出て来るのは極めて自然なことと言えよう。恐らく *Vsm* 本文の挿話が、マハーガーマ時代のことなのか、アヌラーダプラへ移ってから後のことだったのか、*Ṭikā* の作者の時代に既に定かでなくなっていたのであろう。以上の考察により、この *Tissa-amacca* は *Duṭṭhagāmaṇi* 王の大臣であることが判明した。したがって彼の活躍年代はこの王と同じ B. C. 2 C. の中葉と言えよう。

No. 7. Tissadattatthera (*Vsm* II-403)

彼の名は *Vsm* のみならずアッタカターの数書に見られるが²⁰⁾、それらの中で *Smp* (I-104) には、*Kālasumana*, *Dighasumana* 等と共に彼が *Mahā-Ariṭṭhatthera* の弟子であったことが記述されている。この *Mahā-Ariṭṭha* とは言う迄もなく、*Devānampiyatissa* 王 (B. C. 250-210) に甥であって彼の大臣を勤め、後 *Asoka* 王の王子 (或いは王弟) と言われスリランカに仏教を公伝した *Mahindatthera* の高弟となった人である。*Ariṭṭha* の死去したのは *Devānampiyatissa* 王の次の *Uttiya* 王 (B. C. 207-197)²¹⁾ の晩年頃と見られるので²²⁾、したがって *Ariṭṭha* の弟子たる *Tissadatta* が活躍したのは *Devānampiyatissa* 王の晩年頃から *Uttiya* 王及び次の *Mahāsiva* 王 (Geiger 説: B. C. 197-187) の時代にかけてであったろうと推察出来るわけで、即ちそれは B. C. 3 C. の末より 2 C. の前半頃ということになる。

No. 8. Dighabhāṇaka Abhayatthera (*Vsm* I-36, 266)

又は *Mahā-Abhayatthera* と呼ばれる。*Smp* には²³⁾、彼の住んでいた *Cetiyaḡiri* に略奪に来た盗賊 *Cora-Abhaya* と彼との間の挿話が存する。ところでこの *Cora-Abhaya* は *Cora-Nāga* と列記され、両者共に死後 *Lokantarikaniraya* (世界中間地獄) において 3 *gāvuta* の身長のもつて再生したと伝説されている²⁴⁾。したがって彼等兩人が一緒に列記されている点から見て、この両者は同時代人か余り時代を隔てていないと考えてよいだろうし、*Cora-Abhaya*, *Cora-Nāga* の順で示されているから前者の方が少し年代が早かったのではないかと思われる。しかるにこの *Cora-Nāga* とは *Vatṭagāmaṇi* 王の息子で²⁵⁾、*Vatṭagāmaṇi* の次の王 *Mahācūḷi Mahā-Tissa* の治世 (B. C. 76-62) には盗賊として追われていたが、彼の死後、その次の王となった *Cora-Nāga* 王 (B. C. 62-50) に外ならず、よって *Cora-Abhaya* の年代はその少し前 B. C. 2 C. 末から 1 C. の前半頃、恐らく例の *Brāhma Tīya* が暴れ五人のダミラ王の侵攻によって国内が混乱した時期

(B. C. 102—89) と見てよいであろう。因みに *Vsm* (I—36) の挿話もやはり盗賊におそわれて遂に落命した長老の遺体を彼 *Dighabhāṇaka Abhaya* が荼毘して塔廟を造らしめたという内容であって、これも盗賊に関係している。いずれにしてもこの *Cora-Abhaya* と同時代であったのが、この *Dighabhāṇaka Abhayatthera* であるから、彼も又 B. C. 2 C. 末から 1 C. 前半頃の人と考えてよいであろう。

No. 9. Dhammadinnatthera (*Vsm* I—392; II—634)

彼は *Talaṅgara* の住人であったが、*Mhv* によれば²⁶⁾、*Duṭṭhagāmaṇi* 王が *Akkhakkhāyika* 飢饉の時に施食した五人の大長老の一人に彼が含まれている (No. 4 の項参照)。又彼は、この王の息子 *Sāli* 王子が前生において施食した長老の 1 人にも教えられている²⁷⁾。これらの話よりして彼は *Duṭṭhagāmaṇi* 王の時代、即ち B. C. 2 C. 中頃の人と判断してよいであろう。

No. 10. Mallakatthera (*Vsm* I—123, 265—266)

Vsm (I—265—266) によれば、彼は *Dighabhāṇaka Abhayatthera* (No. 8) と交際があった。しかるにその *Abhaya* は既に検討した如く、B. C. 2 C. 末から 1 C. 前半頃の人であるから、*Mallakatthera* も同じ頃の人と考えてよい。

No. 11. Mahā-Tissātthera (*Vsm* I—143)

彼は *Puṇṇavallika* の住人であった。*Vsm* のこの箇所の文章と同一の文が *DhsA* (p. 116) にも見られる。又 *Smp* (III—644) には彼が *ubhatovibhaṅgabhāṇaka* であったとして彼の見解が記されている。ところでそこでは彼の見解は *Mahā-Padumatthera* の意見に続いて述べられていることから、*Adikaram* は彼を *Mahā-Paduma* と同時代人であると考えている²⁸⁾。更に彼のその意見は三衣が生活必需の衣料であるか否かに関する林住比丘 (*āraṇṇavāsī bhikkhu*) の生活規定についてであることから、*Adikaram* は彼を *Vanavāsī Mahā-Tissa* と同一人物ではなかったかとも推察している。しかし上記の彼の意見は “*Mayaṃ pubbe mahātherānam assumhā.....*” という文章で始まっているので、その内容は以前に彼が大長老達から聴いたことを述べたに過ぎないのであって、必ずしも彼が *āraṇṇavāsī* (或いは *vanavāsī*) であると考えする必要はない。むしろ彼に教示した *mahāthera* 達の中にこそ *Vanavāsī Mahā-Tissa* が含まれている可能性もあると言えよう。その上 *Puṇṇavallika* とは *vihāra* の名前であったことが *Vsm T*²⁹⁾ によって知られるから、彼は *vanavāsī* ではなく *vihāravāsī* であったことになる。しかしいずれにしてもこの問題は、*Vanavāsī Mahā-Tissa* が年代不明の人物なので、当面の年代確定の検討には直接関係を持たない。それよりもむしろ彼が *Mahā-Padumatthera* と同時代人であるとすれば、後者は *Vasabha* 王時代 (A. D. 65—109) の人であるから³⁰⁾、前者も当然同じ A. D. 1 C. 後半から 2 C. 初頭頃の人と推定されるのである。確かに例えば *Vsm* においては、同じ事項や問題の例として列挙された人物は同時代人であるという場合が存するから³¹⁾、彼等二人が同時代であった可能性は十分認めることが出来るのである。

No. 12. Maha-Tissatthera (*Vsm* I—43, 47)

彼は Civaragumba に住し、飢饉の時にマンゴー (amba) を食したというので Ambakkādaka Mahā-Tissa と呼ばれた。この名前にまつわる因縁話として *Vsm*T³²⁾には次の如き興味深い挿話が見られるので、少々長文ではあるが全文を翻訳して引用する。

伝え言う。マハーティッサ長老は飢饉の時に道を行きつつ、食事を摂らない為、道に疲れた為に疲労した身体は力が抜け、と或る実をつけたマンゴーの樹の根元に倒れ臥した。多くのマンゴーの実がここそこに落ちていた。その時一人の年老いた優婆塞が長老の許に近づき疲労しているのを知って、マンゴーの果汁を飲ませて自分の背に背負って住居に連れて行った。長老は、

「お前の父でもなく母でもなく、

親戚でもなく縁者でもないのに、

〔私が〕持戒者であるという理由で

〔彼は〕この様な行為をなしたのだ

と自分に訓誡して瞑想に励み観想を増大して、彼の背中に背負われながら〔四〕道を順次に〔証し遂に〕阿羅漢〔道〕を悟った。

因みに以上の記述を裏付けるような、簡単ではあるが同様の挿話が *Vsm* 自身 (I—47) に見られ、そこに示された二偈の内の最初の上記のそれと一致する。ところで問題は、この場合の飢饉が既述の四大飢饉 (No. 4 参照) の内のどれに当るかということであるが、前記の引用によれば、飢饉時でも国王以下の特別の外護を受けていたはずの比丘が行倒れになるほどの大飢饉ということになるから、これはやはり第二回目の Vaṭṭagāmaṇī 王時代の最大の飢饉ではなかったかと推察されるのである。したがってこの Mahā-Tissatthera は Vaṭṭagāmaṇī 王の時代、即ち B. C. 2 C. 末より 1 C. 初頭に活躍した人と一応は推定可能である。

No. 13. Mahā-Devatthera (*Vsm* I—241)

彼は Malaya 地方の住人であったので、Malayavāsī Mahā-Deva と呼ばれているが、時には Maliya-Mahā-Deva, Maliya-Deva とも記されている。彼は Duṭṭhagāmaṇī 王が Akkhakkhāyika 飢饉の時に特別の施食をした五人の大長老の一人として記述されているし (No. 4 参照)、また彼は Duṭṭhagāmaṇī の息子 Sāli 王子が前生 Tissa という鍛冶屋であった時に、彼より施食を受けた八人の漏尽長老の一人にも数えられている³³⁾。但しここでは Koṭapabbatavāsī Malaya-Mahā-Devatthera となっており、Koṭapabbata とは Rohaṇa 地方の山の名であるが、両者は同一人物と考えてよい³⁴⁾。いずれにしてもこの挿話も Duṭṭhagāmaṇī 王と関係が深いものであり、これら両話共に彼が Duṭṭhagāmaṇī 王の時代の人であることを立証していると見てさしつかえない。

No. 14. Mahā-Dhammarakkhitatthera (*Vsm* I—96)

彼は Rohaṇa 地方の Tulādhārapabbatavihāra に住し、一切の聖典に通ずる者 (sabbapariyattika) と言われていた。この彼の許に Mahāvihāra の Tipiṭaka Cūḷa-Abhayatthera (No. 2) が師の推めで 500 人の比丘と共に参上して法を問うた。Dhammarakkhita も又、実践道では既に須陀洹であった Abhaya に業処について教えを受け、後、遂に阿羅漢道に達し、般涅槃したという挿話が *Vsm* のそれである。したがって彼等兩人は同時代人であり、一方の Abhaya は既述

の通り B. C. 1 C. 後半の人であるから、Dhammarakkhita も又同様である。

Nos. 15. 16. 17. Mahā-Nāgatthera, Mahā-Dattatthera, Cūḷa-Sumanatthera (*Vsm* II—634)

彼等三人を住所と共に記すると

- (1) Uccavālikavāsī Mahā-Nāgatthera
- (2) Haṅkaṇakavāsī Mahā-Dattatthera
- (3) Cittalapabbata, Nikapeṇṇakapadhānagaravāsī Cūḷa-Sumanatthera

となるが、*Vsm* では彼等三人は共に、定によって鎮伏された諸煩惱が生起しないことから「我は阿羅漢なり」という心を起した人物の例として挙げられている。そして彼等の内の Mahā-Nāga は Taḷaṅgaratissapabbata の住人 Dhammadinnatthera (No. 9) の師に当り、後者の努力によって前者が最後には本当に阿羅漢位に達するという挿話が示されている。又 *VibhA* (p. 489) にも同一の文章が見られる。ところで *MA* (I—184~185) には、この Dhammadinnatthera が同じく増上慢の故に阿羅漢であると思いついて二人の長老を教導し最後には本当に阿羅漢になさしめたという挿話が見られる。但しこの二人の長老の名前は明記されておらず、‘Haṅkanavihāra’ の ‘eko mahātthero’ 及び ‘Cittalapabbate tādiso thero’ と呼ばれている。しかし *Vsm* の記述よりして、彼等二人は当然上記の(2)と(3)の人物と考えてよいであろう³⁵⁾。以上の考察によりこの三人の長老はいずれも Dhammadinnatthera と同時代、即ち Duṭṭhagāmaṇī 王治世の B. C. 2 C. 中葉の人と結論出来るのである。

No. 18. Phussadevatthera (*Vsm* I—228)

彼は Kaṭakandhakāra³⁶⁾の住人であった。ところで *Jātaka Atṭhakathā* (*JA* IV—490) は、Kuddāla等五ヶ所の集会(samāgama)に遅参した長老として、彼を含めた次の七人の名前を挙げている。

- (1) Paṭhavicālaka Dhammagutta
- (2) Kaṭakandhakāravāsī Phussadeva
- (3) Uparimaṇḍalakamalayavāsī Mahā-Saṅgharakkhita
- (4) Maliya Mahā-Deva
- (5) Bhaggirivāsī Mahā-Deva
- (6) Vāmantapabbhāravāsī Mahā-Siva
- (7) Kāḷavallimaṇḍapavāsī Mahā-Nāga

彼等の内で(4)は飢饉の時に Duṭṭhagāmaṇī 王の特別の施食を受けた五人の長老の一人であり(No. 13 参照)、又同じく(1)と(7)とは Duṭṭhagāmaṇī の王子 Sāli の前生において彼の施食を受けたとされる長老の中に数えられている³⁷⁾。ところで上記の両話に共通して挙げられている人物として Dhammadinnatthera (No. 9) が存することから、この両話に挙げられている人物は凡て同時代の人と考えてよからう。さて一方同じく *JA* (VI—30) にも、前述の五ヶ所と同じ地名の内の四ヶ所を挙げて(表記は若干相違している場合がある)、そこでの集会に遅参した長老として同

じく Phussadeva を含めた次の六人の名を記している。

- (a) Maṅgaṇavāsī Khuddakatissa
- (b) Kaṭakandhakāravāsī Phussadeva
- (c) Uparimaṇḍakamālavāsī Mahā-Rakkhita
- (d) Bhaggarivāsī Mahā-Tissa
- (e) Vāmattapabbhāravāsī Mahā-Siva
- (f) Kāḷavelavāsī Mahā-Maliyadeva

彼ら六人中、Phussadeva 以外でも(3)–(c)、(4)–(f)³⁸⁾、(6)–(e)の三人はそれぞれ同一人物と考えられ、(5)–(d)も恐らく同様であろうと思われる。そして後者の場合の(a)も同じく飢饉時に Duṭṭhagāmaṇī 王の特別施食を受けた一人に挙げられているから³⁹⁾、結局ここに登場する人物で年代の判明せる者((1)、(4)–(f)、(7)、(a))四人は凡て Duṭṭhagāmaṇī 王時代の人ばかりである。したがって問題の Phussadeva ((2)–(b))を含めた残りの四人((2)–(b)、(3)–(c)、(5)–(d)、(6)–(e))も同時代の人物と結論されるのである。

3. 年代不明の人物

No. 19. Cittaguttatthera (*Vsm* I–38, 171, 173)

Vsm (I–38)によれば、彼は Kurāṇḍaka Mahālena (大窟)に住んでいて根律儀 (indriya-saṃvara) を完全に遵守していた比丘であった。例えば彼は窟内に画かれていた七仏出家の美しい絵画や、窟前の大龍樹の花をかつて眺めたことがなかった等という挿話が述べられているが、この同じ挿話中に Mahāgāma に王城があったある王と彼との交渉が記されている。ところがこの王が誰れであったのか判明しないので、彼の年代は決し難い。*VsmT* もこの点については何も記していない⁴⁰⁾。因みに *Sihaḷavatthupakaraṇa* 第66話 Cittaguttattheravatthu は⁴¹⁾、*Vsm* のこの説話と類似した内容のものであり⁴²⁾、そこに登場して来る王は Mahā-Sena 王 (A. D. 276–303)である。しかし説話の舞台は示されていない。一方この Mahā-Sena 王はアヌラーダプラに終始居住した王であって、Mahāgāma に移住したことはない⁴³⁾。したがって *Vsm* の挿話と *Sihaḷavatthu* の説話とは、そのソースを共有しているような類似性があるとしても、このことを以って *Vsm* の源泉資料の年代論を論ずる場合の証左として採用することは適切ではない。

No. 20. Cūḷa-Slvatthera (*Vsm* I–170)

前節 No. 5 の箇所而言及したように彼の活躍年代は不明である。

No. 21. Tissatthera (*Vsm* I–292)

彼は Koṭapabbatavihāra に住した Tissatthera であり、*Puggalapaññatti Aṭṭhakathā* (*PuggA*

p. 186) にも出て来る。Vsm においては、安般念 (ānāpānasati) を修習して阿羅漢果を得、死期を予知して身体・衣服等を整えて死去した比丘四人中の一人に挙げられており、Pugg A においては阿羅漢となり立ったまま死去した人の例として述べられている。しかし彼の活躍年代については不詳である。

No. 22. Tissatthera (Vsm I—116, 191)

彼は Cūlapiṇḍapātika Tissatthera と呼ばれていた。Vsm 中二ヶ所に挙げられている同名人は共に上記の通りであって、これは同一人物と見てよいであろうが、在住地乃至は在住精舎の名は知られない。しかるに AA には、Rohaṇajanapada の Gāmeṇḍavālavihāra に住んでいた長老 (AA I—36) と Girivihāra に住んでいた長老 (AA I—215) の二人の同名異人の挿話が出ている。しかし Vsm の同名人を彼等二人の内いずれか一方と同一視しても、又は二人のいずれとも異なる第三の Cūlapiṇḍapātika Tissa として検討しても、いずれの場合もその活躍年代は不明である。

No. 23. Tissatthera (Vsm I—292)

彼は Devaputta-mahāraṭṭha (天子王国) の Piṇḍapātika Tissatthera と言われており、全アッタカター中 Vsm のこの箇所には一回出て来るだけである。彼も安般念を修習して阿羅漢果を得、死期を予知して身体・衣服等を整えて死去した比丘四例中の一人として挙げられているが、その年代は不明である。前項の Cūlapiṇḍapātika Tissa に対して Piṇḍapātika Tissa という名があるわけだから前者よりは先輩であろうが、それ以上のことは判明しない。

No. 24. Nāgatthera (Vsm I—96)

彼は Kāraḷiyagiri の住人であって、全アッタカター中 Vsm のこの箇所に一度出て来るのみである。このような場合は年代が判明し難いことが多いが、彼の場合も同様で、彼は十八年間聖典を捨てて顧みず、しかも諸比丘に Dhātukathā を説いて誤りがなかったという逸話の持ち主であるが、その活躍年代は不明である。

No. 25. Padhāniya Tissatthera (Vsm I—127)

Padhāniya (精勵) と冠称された Tissatthera は全アッタカター中、ここだけに現れる。彼は Nāgapabbata (Malaya 地方) の住人であった。しかし彼の年代は不明である。

No. 26. Buddharakkhitatthera (Vsm I—154; II—376)

彼の名は Vsm I—154 には Buddharakkhita とあり、Vsm II—376 には Rakkhita とある⁴⁴⁾。しかしこの両者は共に法臘八歳の時に Therambatthela の Mahā-Rohaṇaguttatthera (No. 33) を看病した人物として描かれているので、やはり Buddharakkhita という名の同一人物と考えてよいであろう⁴⁵⁾。しかし彼の年代は不明である。

No. 27. Mahā-Anulatthera (Vsm II—404)

彼も全アッタカター中、Vsm のこの箇所にだけ出て来る人物である。これによれば、彼は多数の比丘が行乞して乾食 (sukkhabatta) を得て Gaṅgā の岸に坐して食べているのを見て、

「Gaṅgā の水は醍醐 (sappimaṇḍa) になれ」と決意して沙弥たちをしてそう想わしめた。彼等は〔そう想いつつ〕小椀に汲んで比丘衆に与えた。すべての比丘たちは美味しい醍醐を以って食事した、とされている。ここで Gaṅgā とはインド本土のガンジス河を意味するようにも解し得るが、*VsmT* (vol. II p. 873, § 87) に “*Gaṅgātire ti Tambapaṇḍīpe Gaṅgānadiyā tire*”. とあるので、これがダンバパンニ島 (スリランカ) の話であることがわかる⁴⁶⁾。しかし彼 Mahā-Anula の年代は不明である。

No. 28. Mahā-Tissatthera (*Vsm* II—689)

彼は Kalyāṇigāma (美人村)⁴⁷⁾を行乞している時に、異性の容色を見て煩惱を生起させた人の例として挙げられている。また *Suttanipāta Aṭṭhakathā* (I-6~7) にも同一の挿話が見られる。しかし彼の活躍年代は不明である。

No. 29. Mahā-Tissatthera (*Vsm* I—20, 193, 194)

彼はこの *Vsm* に出て来るのみであって、Cetiyaḥabbata の住人であった。但し *Vsm* (I—193) の Mahā-Tissa は Cetiyaḥabbatavāsī とは明記されていないが、*Vsm* の上記の三ヶ所に述べられている挿話は、いずれも女性の歯骨を見て不浄想を觀じ阿羅漢果を得たという実例、あるいはそれを簡略にした内容なので、これらは同一人物の話と考えてよい。しかも Cetiyaḥabbata の住人と明記されていない Mahā-Tissa の場合にも、*VsmT* (vol. 1, p. 402, § 43) には、 “*Mahā-Tissattherassa ti Cetiyaḥabbatavāsī Mahā-Tissattherassa*.” と註記されているので、この点は疑う余地がない。しかし彼の年代は不明である。

No. 30. Mahā-Tissatthera (*Vsm* I—292)

彼は Mahākaraṇḍīyavihāra に住んでいた。彼も安般念によって阿羅漢果を得、死期を予知して死んだ比丘四人中の一例として挙げられているが、年代は不明である。全アッタカター中、*Vsm* のこの箇所だけに記されている。

No. 31. Mahā-Nāgatthera (*Vsm* II—706)

彼に関しても *Vsm* のこの箇所以外に挿話は見当らず、住んでいた土地・精舎等も不明であり、年代も明からでない。ただこの挿話では、彼は母のいる村落を行乞して火事に会い、最後に Piyāṅgu 島 (スリランカ北部) へ飛行したとされているので、彼がスリランカの長老であったことは確実である。

No. 32. Mahā-Mittatthera (*Vsm* I—38, 39)

彼は Corakamahāvihāra の住人であって、Kuraṇḍaka Mahāleṇa に住んでいた Cittagutta-thera (No. 19) と共に常に根律儀の完全であった比丘の例として挙げられている。しかし年代は知り得ない。

No. 33. Mahā-Rohaṇaguttatthera (*Vsm* I—155 ; II—375)

彼は Therambatthala⁴⁸⁾に住んでおり、在定自在、出定自在の実例、あるいは神変を得て即座

にそれを現わし得た人の例として挙げられている *Buddharakkhitatthera* (No 26) の物語中に登場するのである。又 *Dhs A* (p. 187) にも *Vsm* の挿話として引用されているが、いずれにしても年代は不明である。

Nos. 34. 35. 36. Mahā-Saṅgharakkhitatthera (*Vsm* I—47, 104), **Saṅgharakkhitatthera** (*Vsm* I—47, 194), **Saṅgharakkhita-sāmaṇera** (*Vsm* I—45)

彼等三人の *Saṅgharakkhita* はそれぞれ上から順次、叔父・甥の関係にあったという。即ち *Mahā-Saṅgharakkhitatthera* の甥が *Saṅgharakkhitatthera* で、後者のその又甥が *Saṅgharakkhita-sāmaṇera* である⁴⁹⁾。なお *Vsm* I—194 に “*Saṅgharakkhitattherūpaṭṭhakasāmaṇerassa viya*” とあるが、この *sāmaṇera* も恐らくこの *Saṅgharakkhita-sāmaṇera* のことであろう。いずれにしても姻戚関係にあった彼等三人の *Saṅgharakkhita* の年代は判明しない。なお *Mahā-Saṅgharakkhitatthera* という名前は他のアッタカターに数回出て来るので、彼等と *Vsm* の同名人との関係については今後の検討を要する。

No. 37. Mlīhabhāyatthera (*Vsm* I—79)

彼の名前が出て来るのは全アッタカター中、ここだけである。彼の為に人々が七肢椅子を作り、彼は阿那含となって般涅槃したという簡単な挿話がここに示されているが、彼の年代は不明である。

Nos. 38. 39. Revatthera⁵⁰⁾ (2人) (*Vsm* I—95)

ここに二人の *Revatthera* が登場する。一人は *Majjihimbhāṇaka* であり、一人は *Malayavāsī* である。挿話は前者が後者の許に行き、*Majjihimbhāṇaka* であるのに二十一年間中部経典を捨てて業処を修習し、遂に阿羅漢位に達したという内容であるが、両者共に全アッタカター中、*Vsm* のこの箇所にはしか出て来ないので、彼等の年代は不明である。

No. 40. Visākhātthera (*Vsm* I—312)

彼に関しては *Vsm* のこの箇所と、*AA* (V—83) に *Vsm* よりの引用として一度出て来るのみである。彼は *Pāṭaliputta* の富豪であったが、後、アヌラーダプラの *Mahāvihāra* で出家し、慈に住せる比丘として非人 (*amanussa*) に愛されたと言われているが、しかし年代は不明である。

4. 結 論

第2・3節で検討した結果、*Vsm* に現れる古代スリランカで活躍した人物四十人の内、種々なる論証によって、その活躍年代が判定出来た人物は第2節で論述した十八人であった。そこで彼等十八人を年代順に列挙すると次の如くである。先ず、B. C. 3 C. 末から 2 C. 前半頃、即ち *Devānampiyatissa* 王 (B. C. 250—210) の晩年頃より *Uttiya* 王 (Geiger 説: B. C. 207—197) の時

代を経て、次の Mahā-Sīva 王 (Geiger 説: B. C. 197—187) の時代頃まで活躍したと考えられる人物として、

1. Tissadattatthera (No. 7)

が存する。次に Duṭṭhagāmaṇī 王 (B. C. 161—137) の時代、即ち B. C. 2 C. の中葉に活躍した人物として、

2. Tissa-amacca (No. 6)

3. Dhammadinnatthera (No. 9)

4. Mahā-Devatthera (No. 13)

5. Mahā-Nāgatthera (No. 15)

6. Mahā-Dattatthera (No. 16)

7. Cūḷa-Sumanatthera (No. 17)

8. Phussadevatthera (No. 18)

の七人が挙げられる。次いで Vaṭṭagāmaṇī 王の最初の在位期間 (B. C. 103—102) 及びそれに次いで大飢饉や Brāhmaṇa Tiya の危難が起り五人のダミラ王が支配した混乱の時期 (B. C. 102—89) を経て、Vaṭṭagāmaṇī 王が再度王位に就いた期間 (B. C. 89—77)、換言すれば B. C. 2 C. の末より 1 C. の前半頃に活躍した人物は、

9. Cūḷa-Samuddatthera (No. 4)

10. Cūḷa-Sīvatthera (No. 5)

11. Dīghabhāṇaka Abhayatthera (No. 8)

12. Mallakatthera (No. 10)

13. Mahā-Tissatthera (No. 12)

の五人である。更に Kūṭakaṇṇa Tissa 王 (B. C. 41—19) の時代、即ち B. C. 1 C. の後半に活躍した人物は、

14. Cūḷa-Abhayatthera (No. 2)

15. Cūḷa-Nāgatthera (No. 3)

16. Mahā-Dhammarakkhitatthera (No. 14)

の三人である。次いで Kūṭakaṇṇa Tissa の次の王で、西暦紀元元年前後に在位した Bhātika Abhaya 王 (B. C. 19—A. D. 9) の時代に活躍した人物として、

17. Godattatthera (No. 1)

最後に A. D. 1 C. 後半から 2 C. 初頭にかけて在位した Vasabha 王 (A. D. 65—109) 時代の人物として、

18. Mahā-Tissatthera (No. 11)

が存する。以上十八人の年代を全体的に眺めると、その上限は B. C. 3 C. 末に当る Devānampi-

yatissa 王の晩年頃であり、その下限は上記の Vasabha 王の時代、即ち A. D. 1 C. 後半から 2 C. 初頭にかけての時代である。これが *Vsm* に現れた活躍年代の判明せる人物の全体的活躍期間であり、ひいてはこれが *Vsm* の源泉資料の年代、即ち *Vsm* の「内容的成立年代」ということになる。因みにこの年代を *DA* のそれと比較すると、*DA* の場合は、

Duṭṭhagamaṇī 王——Vasabha 王

の期間であって⁵¹⁾、その上限は *Vsm* の方が少し遡るが、下限は全く同一である。しかし *DA* の年代研究の場合にも述べたように、これら各アッタカターの源泉資料の年代論の結論は、あくまでも全アッタカターを一つの研究対象として、総括的総合的に検討して、全体として最終的結論を出すべきであるから、今回の *Vsm* の場合も本書だけの考察で、最終的結論を述べることは差し控えておくこととする。つまり今後 *DA*, *Vsm* に次いで各アッタカターを先ず個別的研究し——勿論各アッタカターは相互に複雑に関連し合っているが——それら各個の結論を凡て総合して、一つの文献群としてのパーリ・アッタカターに対して最終的な結論を下す必要があるだろう。それにしても *DA* と *Vsm* の年代の下限が共に Vasabha 王の時代であって、それよりも下らないという点は、やはりこれらのアッタカター文献が内容的には A. D. 5 C. 前半の Buddhaghosa の時代よりもかなり古い時代のものに止まっていることを示唆していると言えよう。

註 (本稿使用のパーリ原典は、特記のない限り、凡て PTS 版である)

- 1) 『仏教研究』(浜松) 第 2 号, pp. 115~100
- 2) *ibid.* pp. 105~104
- 3) 『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第八号, pp. (3)~(15)
- 4) *Smp* II—307, 430, 478; III—588
- 5) スリランカ国王の在位年代は C. W. Nicholas & S. Paranavitana, ed.: *University of Ceylon, A Concise History of Ceylon*, Colombo, 1961 所収の最新の年代表 “A Chronological List of Ceylon Kings” に依った。なおこの年代表に関しては、拙稿「スリランカ王統年代論再考——W. ガイガー説修正の研究史——」(『仏教研究』第 6 号, 1977) pp. (57)~(81) 参照
- 6) *DA* II—442, 530; *VibhA* pp. 11, 16, 457; *PuggA* p. 190; *SA* III—264, 277; *MA* I—155; IV—94, 148, 189; *AA* I—26; *DhsA* p. 230; *Smp* III—591, etc.
- 7) H. Ellawala: *Social History of Early Ceylon*, Sri Lanka, 1969, p. 133
- 8) 平常はさいころを作る akkha (Terminalia Bellerica) という堅い実までも食したのでかく名付けられた (W. Geiger, tr.: *The Mahāvamsa*, London, 1964 (初版 1912), p. 222, note 6)
- 9) 石 (pāsaṇa) をも食べる飢饉 (chātaka) というのでかく名付けられた (*Mahāvamsa Tikā* (MT) II—593)
- 10) *Mhv* XXXII, vv. 29~30, 49~54
- 11) *Kelāse ti Kelāsakūṭa-mahāvihāre* (MT II—598)
- 12) cf. *Mhv*. XXXIII, vv. 37 ff.
- 13) H. C. Ray, etc., ed.: *University of Ceylon, History of Ceylon*, Colombo, 1959, vol. 1, pt. 1, pp. 166~167, 244~245
- 14) *Mhv* XXXVI, vv. 19~20

- 15) *ibid.* XXIV, vv. 21 ff.; AA II—30, 212
- 16) *Mhv.* XXXIII, v. 91
- 17) *Visuddhimaggo with Paramatthamañjūsāṭṭhikā (VsmT)*, 3 vols, Varanasi, 1969~72 (インド版), vol. 1, p. 150, § 7
- 18) *Mhv* XXXIII, vv. 33 ff. 特に v. 48
- 19) *ibid.* XXII~XXV
- 20) *Smp* I—62, 104; *MA* I—290; *AA* II—54; *VibhA* pp. 275, 387, 389, etc.
- 21) この在位年代は註(5)の最新説には記入されていないので、便宜上 Geiger 説を示した。Geiger 説の方が三年遅くなっている。
- 22) *Mhv* XX, vv. 53 ff.
- 23) *Smp* II—474~475 cf. *DhsA* p. 399
- 24) *DA* II—530; *AA* III—127; *MA* II—920
- 25) *Mhv* XXXIV vv. 11 ff.
- 26) *ibid.* XXXII vv. 29~30 & 52
- 27) *MT* II—606. 但しここでは ‘Piyāṅgudipe vasanto pana Talaṅgattissapabbatavihāravāsiko’ となっている。又 *MA* (I—184) には Talaṅgarattissapabbatavāsī となっている。
- 28) E. W. Adikaram: *Early History of Buddhism in Ceylon*, Colombo, 1953 (初版 1946), p. 82
- 29) *VsmT* vol. 1, p. 307, § 80
- 30) *Smp* II—471
- 31) 例えば Nos. 15, 16, 17 の三人の場合がそうである。
- 32) *VsmT* vol. 1, pp. 109~110, § 84
- 33) *MT* II—605~606
- 34) Koṭapabbatavāsī Malaya-Mahā-Deva と言った場合、Malaya は彼の出身地を意味するものであろうか。
- 35) この点については *Ṭikā* にも特別の言及はない (*Mūlapaññāsaṭṭhikā* (ビルマ第六結集版) 1962, vol. 1, p. 287)
- 36) この名称は *Cūlavamsa* XXXV, v. 3 にも見られる。なお『清浄道論一』(南伝 62 卷) p. 451, 註 8 の論拠は判明でない。*VsmT* (I—501, § 91) にも何の言及もない。
- 37) *MT* II—606
- 38) *JA* VI—30, 註 13 では一本に Mālāya Mahā-Deva とある。
- 39) *Mhv* XXXII, v. 53
- 40) *VsmT* vol. 1, p. 102~103, § 79
- 41) A. P. Buddhadatta, ed.: *Sihaḷavattthupakarāṇa*, Ceylon, 1959, p. 153
- 42) この点に関しては、拙稿「*Sihaḷavattthupakarāṇa* の資料的特徴」(『中村元博士還暦記念論集・インド思想と仏教』春秋社 昭和 48 年 11 月) pp. 315~317
- 43) *Dpv* XXII, vv. 66~76; *Mhv* XXXVII, vv. 1 ff.
- 44) *VsmT* (vol. 1, p. 329, § 107; vol. II, p. 817, § 8) も Harvard Oriental Series 版の *Vsm* (vol. 1, p. 316) もこの点は PTS 版と同様である。
- 45) Rakkhita の場合は ‘Buddha.’ が脱落したのであろう。
- 46) 同様の用例は *Vsm* 自身の中に得られる。即ち *Vsm* (I—96) に “Gaṅgāya parato Rohaṇa-janapade……” (ガンガーの向こうのローハナ地方に……) とある。この Gaṅgā とは言う迄もなく島の中央部を流れる第一の大河、今日の Māhāveligaṅgā (Mahāvālukagaṅgā, Mahāgaṅgā, Mahāvālukanadi) に外ならない。
- 47) *VsmT* (vol. III, p. 1632, § 40) には “*Kalyāṇigāme* ti evaṃnāmake gāme. Rohaṇe kira abhirūpānaṃ itthīnaṃ uppattiṭṭhānatāya so gāmo tathā vuccati.” とあるので、この美人村が Rohaṇa 地方に存在したことが知られる。

- 48) *VsmT* (vol. II, p. 817, § 8) によれば「Therambatthala とは amba の木々が密集し, Mahā-Mahindatthera 等が降り立った所」とされているので, ここは Geiger が推定している様に, Cetiya-pabbata に Mahinda を記念して建てられた Ambatthalathūpa のある場所であろう (Geiger, tr. : *Mhv* (註 8), p. 264, note 3)
- 49) この sāmaṇera が Saṅgharakkhitatthera の甥であることは, *Vsm* I—45 を註釈した *VsmT* (vol. 1, p. 116, § 91) に “attano mātulassa Saṅgharakkhitattherasseva nāmassa gahitattā bhāgineyya-Saṅgharakkhita-sāmanero”. とあることから明らかである。
- 50) *VsmT* (vol. 1, p. 209, § 33) には Devatthera とあり, HOS 版 (vol. 1, p. 77, § 51) には Revatatthera とある
- 51) 拙稿 (註 3) pp. (11)~(12)